

地球の悲鳴が聞こえる

写真は 2010 年 10 月に名古屋国際会議場で行われた生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）等の日本政府公式ウェブサイト。地元の環境団体「中部の環境を考える会」などの主催で、会議場近くで開かれたシンポジウムに参加



した。あれから 9 年が経つ。大阪湾の人工島「夢洲」に上陸し、久しぶりに生物多様性に触れることができた。朝日新聞 5 月 13 日の標題社説を紹介したい。

人間の活動のせいで、かつてないほどの勢いで地球の自然が損なわれている。生物多様性と生態系の現状を科学的に評価する国際組織（IPBES）が、先日、新たな報告書を公表して警告を発した。

7 年前に設立され、132 カ国が参加する。加盟国の政策づくりに資する提言をめざし、今回のレポートも、日本を含む各国の専門家 145 人が約 3 年をかけてまとめ上げた。そこに書かれたさまざまなデータからは、地球の悲鳴が聞こえてくる。たとえば、世界中に存在すると推定される 800 万種の動植物のうち、少なくとも 100 万種が数十年以内に絶滅する恐れがあるという。そのペースは、過去 1 千万年の平均の 10～100 倍にあたる。背景にあるのは、人類による土地や海、河川の野放図な利用だ。この半世紀で、農林水産業の発展や都市の拡大により、陸地の 75% と海岸の 66% で環境が悪化した。温暖化や、海に流れ込んだプラスチックごみなども生き物の脅威となっている。

このままでは、2010 年に名古屋で開かれた生物多様性条約締約国会議（COP10）で決まった「愛知目標」や、15 年に国連で採択された「持続可能な開発目標」（SDGs）を達成することはできない。報告書はそう見ている。それは、人が生きていく基盤である農林水産業などが、早晚たちゆかなくなることを意味する。一例として報告書は、花粉を運ぶ昆虫が消えてしまうことで農業生産が毎年 5770 億ドル（約 63 兆 5 千億円）も減るリスクがあると指摘する。

IPBES のロバート・ワトソン前議長は「経済や暮らし、食糧安全保障、健康などの基盤を私たち自身が侵している」と訴える。人間の生活は自然の恵みなしでは成り立たない。そんな当たり前の事実を、改めて目を向ける必要がある。残された時間は決して多くない。各国は、あらゆる分野で変革に取りかかるべきだ。食料や燃料、木材など多くの資源を輸入に頼る日本も、地球規模の環境破壊に無関心でいることは許されない。

エネルギーや食料、水などの大量生産・大量消費を見直す。温室効果ガスを減らして地球温暖化の進行を抑える。脱プラスチックを進める…。どれも容易ではないが、成し遂げなければならない課題だ。

来年、中国で開催される COP15 では、「ポスト愛知目標」が議論される。世界を持続可能な姿にするために、どんな戦略を描くのか。国際社会の覚悟が問われている。

(2019 年 5 月 15 日)